

# 豆 狸 の 寝 言

副会長 三原幸二

去年、七十歳を迎えることができました。

老人一年生、ということになるのでしょうか、町内会からは記念品として商品券を頂戴しました。

ゴルフ場からは「敬老の日杯」のご案内をいただき、終了後の懇親会の招待を受けました。あいにく先約がありましたので欠席しましたら、わざわざ記念品を送っていただきました。

子供たちや孫たちも食事会を開いてくれ、記念品をくれました。

先日は、東京へ出張するため環状線に乗りましたら、座っていた大学生二人がずっと立って席を譲ってくれました。

一瞬、「ありがとう」と言って彼らの行為に素直に甘えるべきか、「せっかくですが、足腰はまだまだ大丈夫です」と言ってやんわり断わるべきか、迷いました。

そんなわけで、老いとどう向き合えばいいのか——歳を重ねてこそ、果実もある。自然体で熟せばいいのだと思う反面、自分が老人になったとはまだ本気で思いたくないという気もあって——戸惑っているところです。



じつは、私が子どものころ、悪さをすれば毅然とした態度で叱ってくれた「近所の怖いおっちゃん」というのが、私がなりたい老人像ですが、できればただ怖いだけでなく、人間学を身につけた思いやりのある怖いおっちゃんになりたいもんだなあ、と思っております。

もし「老人学」というようなものがあるのなら、これをしっかり勉強し、身につけて、めざす老人に近づきたいと、殊勝なことを考えている日々でございます。

(古希を迎えて)